

専称院の中興

大正大学教授 玉山成元

東京中板橋の専称院に長夜燈がある。

これは文政二年（一八二〇）二月の彼岸に、臼倉豊利が建てたもので、今は変形した五輪塔のような形をしているが、昔は火袋のついた長夜燈であった。いつしか火袋がこわれてしまい、上の笠がそのまま基壇につけられたため、石塔のような形になった。昭和十年に豊島（北区）から板橋に移したもので、現在は通路に面した塀の前に建っている。長夜燈の左右に記された銘によると専称院の本堂が再建されたのは寛政十一年（一七九九）九月一日であり、閻魔堂は本堂から遅れること十四年、文化十年六月二十七日に再建されることがわかる。当時の住持は十二世の梁誉で、世話人は豊島村の石井大右衛門・臼倉文右衛門・臼倉四郎左衛門の三人であった。

長夜燈の裏面には専称院の概略が刻られている。それによると、専称院は奈良時代の聖武天皇のころ、豊島清光が開創した寺となっている。『専称院縁起』によると、聖武天皇のころ、武蔵国の豪族豊

島清光が、豊島郡内の七か所に七仏を安置する願をおこし、行基菩薩に依頼して作られた一寺であるという。七仏というのは釈迦・薬師・観音・勢至・弥陀・不動・地藏であり、専称院は地藏を安置した寺であったという。なるほど専称院は「亀嶋山地蔵寺専称院」といい、現在も内陣の右脇壇に、舟形光背をもった地藏菩薩立像が安置されている。おそらくこれが昔の本尊であろうが、この仏像は室町時代のものである。

豊島氏の先祖秩父武常は平氏の出であるが、豊島郡に住んだため豊島氏と称し、基盤を作った。やがて源頼義に仕えて前九年の役に参加したが、孫の清光は源頼朝に仕えた鎌倉幕府の御家人であった。だから専称院を開創したという清光は奈良時代の人ではなく、鎌倉時代の人である。さらに本尊と思われる地藏は室町のものであれば、専称院の開創は室町以後となる。その後豊島氏の滅亡とともに寺も傾き、わずかに村の地藏堂として、民間信仰の上に支えられていたらしい。

長夜燈の銘によると、宝永二年（一七〇五）臼倉四郎左衛門が祐天上人の教示によって堂宇を再興して一寺とし、専称院という念仏道場にしたという。『武江年表』には宝永四年とあって二年の誤差がある。『専称院縁起』によると、豊島に住む臼倉四郎左衛門は、祐天上人が牛嶋にすんだころからの信者であった。宝永二年、臼倉夫妻は祐天上人にあい、村中のものに十念を授けてほしいと要請した。

そこで祐天上人は、臼倉家の隣地にある地藏堂で村人に十念を授けたのち、この堂を寺に取りたて、念仏弘通の助けにしたいといったので、近隣の人々は大変よろこび、お互いに浄財を持ちより、一年あまりで寺を建立した。宝永四年正月二十七日、祐天上人は多くの僧侶を引きつけて入仏法要をし、亀嶋山地蔵寺専称院と称号し、小石川伝通院の末寺に加えたという。これは事実と思われる。しかしこのときの本尊はまだ地藏菩薩であった。『専称院財産目録』によると、本尊阿彌陀如来は、宝永八年四月二十五日に、

専称院の中興

大正大学教授 玉山成元

駒込浅嘉町の信徒が寄附し、祐天上人が開眼供養を行ったとある。今度修理の際胎内より日課念仏帳が出てきた。だれのものであるか明らかでないが、タテ五センチ、ヨコ一五センチの袋とし四〇枚の帳面に、小さな字でびっしり書きつめてある。八千遍ぐらいになるうか。アンバランスではあるが、毎日書きつがれている。本願の主になった臼倉四郎左衛門のものとするのが常識であるが、記名が無いのは残念である。当時としては良いできの阿弥陀仏坐像である。こうしてもとから安置されていた地藏菩薩は本尊でなくなつた。しかしその信仰は今も続いている。

それはともかく、旧専称院は北区豊島の隅田川べりにあつた。中世によく河川がはんらんし、多くの犠牲者が出た。そこでいつしかこれらの人々を供養するために建てられたのが地藏寺であつたろうと思われる。地藏様を本尊としていたのもそのためである。しかし数回の災害で寺も傾き、無住の時代が続いた。ちよう

どそのころ豊島村で、寺をまもる役をしていたのが臼倉四郎左衛門であつた。彼は牛嶋時代から祐天上人に帰依していた関係から、祐天上人にお願いし、寺の再興をはかりたいと考えた。当時祐天上人は小石川伝通院の任職で、幕府や大奥に絶大な信頼があり、増上寺の任職と同格に扱われていた。その祐天上人の働きかけによつて地藏寺は再建され、浄土宗の専称院という念仏道場になつた。関東の浄土宗寺院の中には、中興開山とまではいわなくとも、祐天上人の力によつて再興できた寺院が多いと思われる。鎌倉幕府の大仏様（高德院）や専称院はその代表といえよう。